

その 17

634の国の古と今



多摩川歌碑

多麻河泊尔 左良須豆久利 佐良左良尔 奈仁曾許能兒乃 己許太可奈之伎」

「多摩川に さらす手作り さらさらに なにそこの児の ここだかなしき」

(多摩川にさらさらさらす手織り布。流れて白さが増すように、さらにさらになんでこんなにこの娘がいとしいのか)

作者未詳(巻 14・3373)

数字を使った万葉仮名のクイズがある。例えば、「二二は何と読む?」、「十六は?」、「二八十一は?」。そして、「二八十一は、歌の原文では、『二八十一不在國』と使われているが、何と読む?」。

難解である。万葉びとはなんと難しい言葉遊びをするのだろう。この答えは、次回の「その 18」で、大伴家持本人に回答してもらうことにする。

そこで、もっと簡単な現代版万葉仮名クイズである。「六三四九二は何のこと?」、「……ム・サ・シ……ク・ニ……武蔵国のこと?」、「ピンポン。それでは、六三四二五は何のこと?」、「ム・サ・シ……フタ・ゴ……武蔵国の二子玉川?」、「ブー。それではヒント。六三四十と同じです」、「六三四十……?」、「では、さらにヒント。二×五は?」、「二五の十(トウ)」、「そう。で、二五をトウ、と読んでみると、六三四二五は?」、「ムサシ……トウ…武蔵の塔?」、「そうです。どの塔のことですか?」、「武蔵国、東京の塔だから……東京タワー」、「ブー……六三四を634と算用数字で考えてみてください」、「634?……メートル?……そうか、武蔵国の、高さ634メートルの塔……東京スカイツリーだ……東京の『天上の樹』だ!」。

東京スカイツリーの高さを634メートルに決めることになった開発コンセプトを見ると、次の通りだ。

「634(むさし)は、地域性や日本文化を想起させるものと言えます。武蔵とは旧国名の一つで、東京、埼玉、神奈川の一部を含む大規模な地域を指します。東京スカイツリーが立つエリアは、歴史をひも解くとかつては武蔵の国でした。タワーからは武蔵の国を望むことができ、展望台に登ると目の前には、いにしえの風景がよみがえり歴史性や地域性に思いを馳せていただけることと思います」。



東京スカイツリー

開発コンセプトにあるように、かつての武蔵国は、現在の東京都、埼玉県、そして神奈川県の一部、それも横浜と川崎という大都市を含む広大なエリアだった。当時武蔵国の国府は今の府中市にあり、当初は東山道に属したが、宝亀2（771）年、東海道に移管された。この移管の時期が、万葉集の成立の年代に関わってくることになるが、それは後の話。

奈良時代の推定人口は、725年推計で、全国が約450万人、奈良の都が約17万人、武蔵国は約13万人とされている。前回まで取り上げた上総、下総、安房の房総三国は、ほぼ現在の千葉県に当たるが、当時の人口が約22万人、そして、現在が約630万人。それに対して、現在、武蔵国のエリアに住む人々の数は、集計すると約2500万人となるから、奈良時代の約200倍というメガポリスだ。現在の首都圏の地形を見ても、かつてはいたるところ大きな森や谷などが連なり、川に分断された荒れ地に、貧しい農民たちの集落がところどころにあるだけで、その住む家も竪穴式の粗末なものだったに違いない。

それに比べて東京スカイツリーの展望台から見る今の武蔵国はどうか。見渡す限りコンクリートのビルの海だ。目を東に転ずると、東京都と千葉県、つまり武蔵国と下総国の境を流れる大河、元太日川、現在の江戸川が流れ、その川の向こうに手児奈の市川市真間が見渡せる。スカイツリーに程近いところを流れるもう1本の大河は、暴れ川を意味する荒川。スカイツリーの直下を荒川の支流隅田川が流れている。その畔に浅草寺が見える。浅草寺の歴史をたどると、推古天皇の時代にさかのぼることは前回紹介した。この由緒ある寺を中心にできた浅草の町はほぼ万葉集と同じ時期にできたことになる。ちなみに、浅草寺が創建された628年に因んで、東京スカイツリーの高さを628メートルにする案もあったというから面白い。この長い歴史と伝統ある浅草は、一方演芸のふるさとでもある。浅草寺の隣に、演芸の中心となる浅草公会堂がある。その浅草公会堂で、私たちは大伴家持の音楽朗読劇の公演を予定した。千数百年の時を超えて、浅草に甦った家持が令和の由来や万葉集のできるまでを語り、東京2020から世界に向けて、「愛と平和」のメッセージを発信する異種、異才、異色の音楽朗読劇「YAKAMOCHI いや重けよごと」を上演するという舞台企画に無謀にもチャレンジしたのである。ところが突発的な事情によりやむなく公演は中止、舞台の奈落に落ちることになる。それを追いかけるように、その直後からコロナ禍が始まり、緊急事態宣言が発出されてすべての舞台やイベントが中止、東京2020も延期。更には3度目の緊急事態宣言となって現在に至っている。

目を西の方向に転じると、東京の中心部に、周囲と比べると緑豊かな広い一画が見える。皇居である。

家持が陸奥は多賀城で没した前年の 784 年、平城京、いわゆる奈良の都は、長岡京に移り、その 10 年後の 794 年、天皇は京都に移り、以来、平安京が 1869 年まで 1100 年以上続くことになる。そして、明治維新で、天皇は、東の京、東京に移ったことなど、家持は知る由もなかったのである。かつて天皇から直々節刀を授かった持節征東将軍家持が、この皇居に天皇がおられることを聞いたらさぞかし驚き、早速参上して節刀を返還すべく謁見を望まれることだろう。

さらに南に目を転じると、もう 1 つの大河、冒頭の歌が詠まれた多摩川が見える。武蔵国の東歌だが、万葉集の中で、多摩川を歌ったのは、この 1 首だけである。この多摩川、奈良の時代は武蔵国を貫いて流れていたが、現在その下流は東京都と神奈川県境界を流れている。



世田谷区の
「日本語」教科書

その東京側の世田谷区は、2004 年日本語教育特区に指定され、小学校 1 年から週 1 時間、万葉集などの和歌や俳句、漢詩などを取り入れた教科「日本語」の教科書をもとに授業を行っている。「日めくり万葉集」で、多摩川沿いにある世田谷区立玉堤小学校 5 年生の授業を取材させてもらった。

地元の万葉秀歌「多摩川の歌」の授業である。まず先生が歌を音読した後、生徒たちが声を合わせて朗誦する。その後、先生は生徒たちに、この歌を読んで感じたことや歌の意味を問いかけると、生徒たちから口々に答えが返ってくる。

「『さらす手づくり さらさらに』というところなんですけど、「さら」が連続していて、なんか響きとして気持ちいいなと感じました」

「僕は『さらす手づくり』っていうのは、多摩川で手を洗ってるっていうか、手をさらしてる、みたいな感じかなって思いました」

先生「さらしているっていうのは、そのとおりで、何かをさらしています。でも、手ではないんですね。これ実は、ヒントがあります。歌の原文では、『たまがわ』の漢字はこうなっています」。と言いながら、先生は、黒板に「多摩河」と書く。

「あ、あった。多摩川の『ま』のところが、『麻』だ」

先生「はい、教科書にはこの『摩』の字で書かれているし、普段、みんなが『たまたがわ』っていう場合も、この『摩』の字でしょう。でも、元々は、こっちの『麻』の字が使われていたようです」

「昔は手作りで作った布をいっぱい作っていたって、歴史の本とかによく載ってるから、手作りした布を洗ったりしてるんじゃないかと思う」

「先生、私は、『ここだかなしき』ってところが、何かが悲しいっていう感じだと思いました」

先生「確かにかなしきという言葉があるからねえ。今は悲しいっていう意味ですよ。でも、この『かなしき』って言葉は当時は違うんです、実は…」

「はい、女の子のことを言っているから……可愛い……ですか？」

先生「あ、そうですね。『かなしき』というのは、実は、可愛いって意味なんです。可愛いとか、いとおいとか、そういう意味になります。」

「では、多摩川に行って、麻で作った布を、あの娘が洗ってるのを見て可愛いって、いう歌だ」



多摩川で朗誦する
生徒たち

先に万葉学者の中西進氏が、「『かなし』はもともと『愛』、東国の人たちが持っていた単語らしい」、という通り、この歌にも「かなし」という言葉があった。

世田谷区には「砧」という地名もあるが、砧は、洗濯した布を手打ちする布うちの道具や作業のことをいう。また、世田谷区に隣接して調布市があるが、「調」は当時の税のことなので、このあたりの特産品の麻を税金として納めていた名残という。他にも、「布田」や「染地」等布に因んだ地名が残る。

何より驚いたことに、生徒たちは、3回ほど朗誦すると、それをそのまま覚えて暗唱できるようになるという。うらやましい限りだが、若さの所以だ。それがまさに小学校1年時から和歌や詩を音読、暗唱する教科「日本語」の目的である。（恥ずかしながら齢80ともなると、好きな万葉秀歌さえ覚えられないのは、何とも歯がゆいことだ）。

この取材をしてから、10年以上経つが、当時の生徒たちは、20代半ば、すでに社会人になって活躍していることだろうが、まだ当時暗唱した万葉秀歌のいくつかを、今でも朗誦することができるだろう。おそらく、その内の何人かは、万葉集に興味を持ち、短歌や詩の世界に入れ込んでいる若者がいるに違いないのである。

